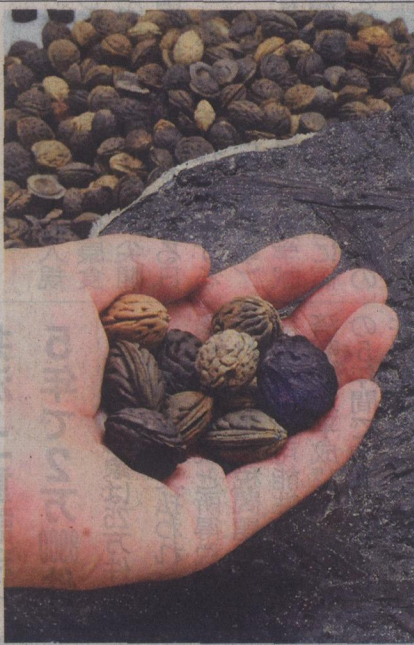


卑弥呼の魔よけ？ モモの種2000個

奈良・纏向遺跡

邪馬台国の最有力候補地とされ、「女王卑弥呼の宮殿」とも指摘された大型建築物跡（3世紀前半）が確認された奈良県桜井市の纏向遺跡から、全国最多となる2千個以上のモモの種が見つかり、桜井市教育委員会

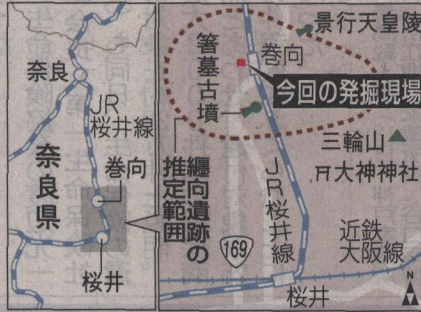


纏向遺跡から出土したモモの種と竹製のカゴ
（奈良県桜井市（沢野貴信撮影））

が17日、発表した。モモは古くから魔よけの果実とされ、中国の歴史書・魏志倭人伝に記された卑弥呼の「鬼道」で使われたとする見方も浮上している。

（28面に関連記事）

見つかったのは、大型建築物跡の約5㍍南に掘られた3世紀中ごろの土坑（南北4・3㍍、東西2・2㍍、深さ80㍍）からで、新たに確認されたさくの延長と重なっており、さくの撤去後に掘られたと推定され



る。

モモの種は2㍍前後で果肉が付着したままの保存状態の良い粒もあり、果実のままだった可能性が高いという。竹製のカゴ6点も一緒に出土し、カゴに盛られたまま投棄されたとみられる。

調査した橋本輝彦・桜井

市教委文化財課係長は「建築物の解体時に執り行われたマツリの痕跡かもしれない」と話している。

現地説明会は19日午前10時～午後3時。JR桜井線巻向駅から徒歩約5分。雨天中止、駐車場はない。

何打った!? バット型木製品

纏向遺跡から祭祀道具

桜井市教委の発掘調査で17日、同市の纏向遺跡からモノの種をはじめ祭祀に関係するさまざまな道具が出土したことが明らかになった。見つかった遺物の中で、ひと際目を引いたのが野球のバットそっくりの木製品だ。

モノの種などとともにも3世紀中ごろの穴から出土し、応援で使うメガホンほどの大きさ。大量に出土した土器や木製品が人為的に破壊されていた中で、例外的に完全な形で残っていた。

市教委によると、ワラなどを打つ横槌とみられ、硬い木材として知られるアカガシ製。土器を打ち壊す祭祀で使われ、そのまま投棄された可能性があるという。19日の現地説明会場でも展示される。



一見バットのような横槌も出土した

奈良

.....
 ニュースのご連絡は
 奈良支局

〒630-8283
 奈良市油留木町44-2
 0742(26)6381-3
 FAX 0742(27)2059

国家的規模の祭祀で使用

倭国女王・卑弥呼（2世紀末〜3世紀前半）がいたともいわれる纏向遺跡（奈良県桜井市）の大型建物の「軒先」に掘られた穴から、ザクザクと出土したモモの種。卑弥呼の好物であったかはともかく、古来魔法の力を持つと信じられた果実だけに、専門家たちは2千という数の多さに驚きを隠さない。「国家的規模の祭祀を示す」との見方で一致し、「鬼道に事え、能く衆を感わす」と魏志倭人伝に描かれた卑弥呼の呪術に迫る発見だとの声も上がっている。（1面参照）

金原正明・奈良教育大教授（植物考古学）によると、モモは弥生時代に稲作とともに国内に入ってきた。現在の大きなモモは明治時代に日本に入った種類



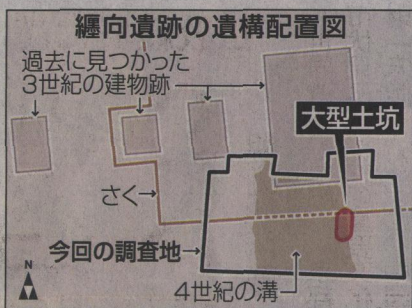
大量のモモの種などが出土した大型土坑（作業員が立っている付近）—奈良県桜井市（沢野貴信撮影）

で、江戸時代まではスモモかウメほどの大きさだったという。

金原氏は「1カ所から出るモモの種は多くても数十個ほど。千個単位は全国に例がない」と驚く。「天皇による新嘗祭の原初形態のような国家的な儀式だったのだろう」と推測する。

「大型建物の中でモモを盛ったカゴをいくつも並べ、卑弥呼が行った祭祀の情景をありありと思いつかべさせる」と感嘆するのは辰巳和弘・同志社大教授（古代学）。モモは、中国・前漢の武帝に特別なモモを与えたと伝えられる道教の女神、西王母の神仙世界を象徴する果実で、「不老長寿の願いが込められた卑弥呼の『鬼道』の姿を具体的に表したものだ」と明言する。

一方、石野博信・兵庫県



立考古博物館長（考古学）は、1片だけ出土した弥生時代を象徴する銅鐸の破片に着目する。纏向遺跡周辺の弥生遺跡の最近の調査で、卑弥呼が登場する時期に銅鐸が破壊され、再利用されたことが分かってきている。「卑弥呼は銅鐸を破壊して弥生の神を否定し、モモに象徴される神仙思想（『鬼道』を引っさげて登場したのだろう。明治時代の廃仏毀釈にも似た宗教改革を断行したのではないか」と語った。